

## 【追悼文】

## 学 ぶ と い う こ と

—岡本 勝先生の思い出—

人文学部非常勤講師

早 川 由 美

3月の岡本先生の通夜・告別式はまだ寒さが残っていた。私は、先生の現職中部大学の非常勤講師であり、前職愛知教育大学での教え子であり、さらに近世文学関係の学会研究会でもご一緒させていただいている関係で受付のお手伝いをさせていただいた。学会関係者や同窓生などが参列してくださったが、突然のことに茫然としていて十分な応対もできず、失礼をしてしまった。

入院先からお電話をいただいて苦しそうなお声に驚き、気になって病院をお尋ねした。「今は見舞いに来なくていい、もっと良くなってからにしてほしい」と電話で言われた通り、まだ会えないと断られた。「ダンディ岡本」と言われていた先生らしいと思い、そのまま帰ってきた。それから一週間後のことであった。遺影はいつも通りにこやかな笑顔で、それは最後にお目にかかった時のままである。

本居宣長の『玉勝間』の中に、宣長が師である賀茂真淵に入門し、学んだことについてまとめた四つの章（巻二 桜の落ち葉）がある。そこでは、真淵の『冠辞考』を読んだ宣長が弟子入りを熱望し、それがかなったこと、古典を学ぶ態度について師に言われたことなどが書かれている。

松阪出身の岡本先生と宣長との関わりは深く、平成14年の「宣長さん二百年」の記念行事の実行委員長でもいらっしゃった。宣長に限らず郷土の文学者や学者を大切に取り上げ研究されていたことは先生の著作を見ればよくわかる。宣長についてのお話をうかがうことはあったが、私が在学中の授業で宣長の作品を取り上げられたことはなかったように思う。

宣長の文章を読んで我が身を振り返ると、学問に対する態度のあまりの違いに愕然とする。大学で岡本先生のゼミに入ったのは偶然の結果だった。入学後まもなく生活指導教官の割当て表が掲示され、「岡本」研と書いてあった。前日のガイダンスで演習の説明があり、「影印本」「冥途の飛脚」という「??」な作品を扱うというので第三希望にした先生だった。授業は受けなかったが、参加したコンパや旅行を通じて、先輩達のように句碑がすらすらと読めたらカッコいいかななどと思い、2年『三冊子』3年『万の文反古』の演習を受講した。変体仮名は演習だけで読めるようにはならなかったが、岡本研では以前から週一回授業後の読書会が行われており、学年を越えて参加したメンバーで『雨月物語』『薄雪物語』『浮世物語』『名女情比』を影印で読んだ。

この読書会では、担当者が翻刻を作り、語注と現代語訳を付けるもので、一つ一つの言葉

を大切に訳すことの大事さを教えられた気がする。拙い訳をつけ、お菓子をつまみながら作品を読み、好き勝手に意見を言い合うことや、先生の話がうかがうことが楽しくて夏と冬の休みには合宿までして一作品を読み上げていた。今から考えると、授業時間以外に先生を付き合わせるなどと迷惑この上ないことをしていたものだ。

このような「演習」形式だったので、担当部分については辞書を引き、文献を調べたりしたが、担当以外の時はなにもせず気楽に参加していた。演習の担当者になって、関係論文を求めて図書館を回り、それを読んでまとめ、問題点を見つける大変さを実感した後、私は岡本先生に「講義の4単位って、ただ聞いているだけなのに演習より多いのって変ですよ」と質問したことがある。その時に先生は「講義の単位は、予習復習の時間を合わせた学習時間に対して出ているんですよ」という趣旨の話がされた。その時には、そういう建前で単位数が決まっているのかと思った程度だったと思う。

その後、『玉勝間』を読んでいて巻八の「講釈・会読・聞書」のところで言われたことを思い出した。ここでは、古典の学習の仕方について述べられており、講釈は先生の講義を聴くこと、会読は自分たちで作品を読んで質問したり、批判しあったりする演習形式のことを言うようである。一見、良く見える演習形式も、学力に差がない仲間同士では相手の発表に質問することもしにくいし、深い読解には至らないという。これは自分が行ってきた演習を考えても納得できる。

講義形式でも、先生の話がただ聞くだけであったり、聞いたことを必死で書き留めるだけでは効果がない。まず「下見」を行って疑問点を持って話を聞くこと、そして家に帰ったらすぐに「かへり見」をして聞いた内容を思い返す。つまり、主体的に作品に向き合って講義を受けない限り、何の力もつかないのだ。

中部大の先生になられた頃、「僕の授業は難しくて、自分たちのレベルに合っていないというアンケート結果があつてね」という話をうかがったことがある。その時に先生は、「学生のレベルが変わってきていると言われるが、基本的な内容が変わるわけではない。ここまでは理解して欲しいというレベルを、僕は下げたくはないねえ」とおっしゃった。日本文学を専攻することを自ら選んで来た学生たちに対して、宣長が自らの教え子に望んだように主体的に学習してほしいと、岡本先生も思っていたらっしゃったのだろう。かつての教え子である私にはこれも耳の痛い言葉である。

最後にお目にかかった時、先生は私の論文集の心配をして、今後の研究について励ましてくださった。そのうちに……などと悠長なことを言っていた自分が悔やまれる。その時、言われたこと、十年前、二十年前に言われた言葉が、いくつも記憶の中に眠っている。先生がよく言われた言葉が、「一期一会」「出会い」であった。人との出会い、本との出会い、作品との出会い。その時に聞いた言葉も「出会い」なのであるが、意識していないとただの通りすがりで終わってしまう。何年たっても、予習復習もしっかり出来ない「不肖未熟な弟子」であるが、学んだことの一つでも、実行できることを見つけていきたいと思う。

岡本先生はおだやかで優しい部分が多かったが、教育者として厳しさを持って私たちと向かい合ってくださっていたことに気づいたのはずいぶん後である。同じように、岡本先生の授業を受けてきた学生みなさんが、その時には理解できなかったことに気づけるのはこれから。先生の言葉の種がふと芽を出す時、一期一会の出会いに感謝できることだろう。

先生が、「仕事に追いかけるのではなく、早く追いかけるようになりたいね」と言われたことがあった。芭蕉や、三重の俳人たち、西鶴など先生が追いかけて、書きたいと思っただけの論文はまだまだあったはずだ。仕事に追いかけれなくなった今、ゆっくりと追いかけたかった論文を仕上げただけなのではないか。先にそちらに行かれています、本好きな諸先生方とさぞかし話がはずんでいるのではないだろうか。元の美声に戻って、朗らかに笑っていらっしゃることだろう。

多くの御学恩に感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。